

会における生命の意義と内容を学ぼうとすることによって、また世論や世間の非難から解放されることによつてできるのです。投票用紙ではなく、このことだけが女性を解放し、女性をこれまで世に知られなかった一個の力とし、また真の愛、平和、調和への力とするでしょう。さらに、それは命令を与える聖なる火の力となり、自由な男女の創造者となるでしょう。

愛国心

—自由への脅威—

愛国心とは何であろうか。愛国心とは、出生地への愛。すなわち子供時代の思い出と希望、樂園への愛だろうか。それは、子供らしい純真さで流れる雲を見守ったり、どうしてあんなに速く自分たちも走れないのだろうかといふかったりした場所なのであるか。何十億というキラキラ輝いている星の一つ一つがすなわち一つ一つの目で、それが小さな魂の奥底を刺し貫かないよう恐怖におののきながらよく数えたりした場所であるのだろうか。それはまた、鳥のさえずる楽の音に耳を傾けたり、遠くの土地へ飛んでゆく羽を持ちたいなあと願ったりした場所であるのだろうか。または、母の膝の上で勇ましい行為や征服のすばらしい物語で有頂天になった場所であるのだろうか。つまり、愛国心とは幸福な楽しい遊び盛りの子供時代のなつかしい大切な数々の思い出をあらわしている場所への愛であるのだろうか。もしそういうのが愛国心だとしたら、今日のアメリカ人で愛国的だといわれる人は、殆んどいないだろう。なぜなら、遊びの場所は、工場、製粉所、鉱山になつてしまつたし、一方では鳥のさえずる楽の音の代りに、機械の耳をつんざく音響に代つてしまつたからです。また勇敢な行為の物語も最早や聞くことはできない。なぜなら、今日の母親がしてくれるお話は、悲しみ、涙、嘆きのそれではないからです。

では愛国心とは何でしょうか。ジョンソン博士は言つた。「閣下、愛国心とはヤクザの最後の逃げ

場なのです。」現代最大の反愛国者であるレオ・トルストイは、愛国心を定義して、大量の人殺しなどの訓練を正当化する原理、靴や衣類や家のような生活必需品を作るより人殺しの練習用のいい設備を必要とする取引、普通の労働者よりよい報酬と名誉を保証してくれる取引きであるとしたり。もう一人の偉大な反愛国者、グスタフ・ハーブは、正しくも愛国心を迷信と呼んだのです。それは宗教よりもっと有害で、野蠻で非人間的な迷信です。宗教の迷信は、自然現象を説明することができないという人間の無知から生まれました。すなわち、原始人は雷を聞いたとき雷光を見たとき、その二つとも説明ができなかったのである。それで、自分たちの背後には自分たちより大きな力があるんだと考えたのです。同じようにして、原始人は雨の中や自然界のいろいろな変化の中に、超自然的な力を見ました。ところが愛国心は人工的に創られ、嘘と偽りの網の目で維持される迷信なのです。そして、人の自尊心と品位を奪い、人の尊大とうぬぼれを増す迷信なのです。

実際、うぬぼれや尊大やわがままが、愛国心の本質である。例で説明しよう。愛国心はわれわれの地球を分割して小さな部分とし、一つ一つの部分はそれぞれ鉄の門でかこまれているとする。そのうちのどれか特別な部分に生まれる幸運に恵まれた者は、自分たちが他のどの部分に住んでいる住人より勝っていて、高貴で偉くて智恵もすぐれていると思ひこむ。だからその優越性を他のすべての者にゆきわたらせようとして、戦争をしたり、殺したり、死んだりするのは、この選ばれた部分に住んでいるすべての者の義務だということになる。

他の部分に住んでいる者は、幼年時代から、ドイツ人、フランス人、イタリア人、ロシア人などについて、身の毛もよだつ話で子供心が毒された結果、むろん同じように考える。子供は大人になった時どんなに異国人の襲撃や侵入に立ち向い、自分の国を守るよう神により選ばれているか徹底的に教

えられる。わたし達が声を大にして陸・海軍の増大や戦艦と弾薬の増加を求めるのは、この故なのです。アメリカが、短期間で四億ドルを費やしたのはこのためなのです。国民の生産から取った四億ドル—このことを考えてごらんさい。—というのは、愛国心に寄与したのは金持ちでないことは確かです。彼らは、どんな所にいても、完全にくつろいでいるコスモポリタンなのである。アメリカにいる我々は、このことの真実をよく知っている。我々の金持ちのアメリカ人は、フランスにいらるとフランス人、ドイツではドイツ人、イギリスにいればイギリス人ではないのだろうか。そして、彼らはアメリカの工場の少年労働者や綿生産の奴隷たちによってつくり出された財産を、世界的な上品さで浪費しなかっただろうか。そうなんです。彼らの愛国心は、セルギウスがロシア革命家たちによって罰せられた時、ルーズヴェルト大統領が彼の国民の名でやったように、何かの災いがロシア皇帝にふりかかった時、こういう専制君主に悔みのメッセージを送ることができるようになる愛国心なのである。それは第一級の殺人者デリアズを助けてメキシコで何千という生命を殺させたり、またはアメリカに住んでいるメキシコ人革命家の逮捕にさえ手をかし、少しのいわれや理由もなしに、アメリカの監獄に監禁状態にさせるような愛国心なのです。しかし愛国心は富と力を代表する人びとのためのものではない。それは本当は人びとのために十分良いものの苦です。それは、人にヴォルテールの親友であるフレデリック大王の歴史上有名な名言を思い出させます。

彼は言った。「宗教は詐欺であるが、大衆のために維持されねばならない。」

愛国心は、どちらかといえば費用のかかる一つの制度だということは、次のような統計を考慮すれば、誰も疑えないでしょう。最近二十五年の間、世界の主要国の陸軍と海軍への出費が、だんだん増加したのは、すべての思慮深い経済問題研究者を驚かすほどの重要性をもった事実です。一八八一年

から一九〇五年に至る時期を五年間ずつの期間に分けることによって簡単に示すことができます。そしてまた、その期間のはじめから終りまでの間、幾つかの大国の軍備の支出額を注意して見れば、簡単に示すことができるのです。上に述べた期間の最初から最後の期間に至るまでにイギリスの支出は、二、一〇一、八四八、九三六弗から四、一四三、二二六、八八五弗へと増加した。

フランスは 三、三二四、五〇〇、〇〇〇弗から三、四五五、一〇九、九〇〇弗へ増加し、

ドイツは 七二五、〇〇〇、二〇〇弗から二、七〇〇、三七五、六〇〇弗へ、

アメリカは 一、二七五、五〇〇弗から二、六五〇、九〇〇、四五〇弗へ、

ロシアは 一、九〇〇、九七五、五〇〇弗から五、二五〇、四四五、一〇〇弗へ、

イタリアは 一、六〇〇、九七五、七五〇弗から一、七五五、五〇〇、一〇〇弗へ、

日本は 一八二、九〇〇、五〇〇弗から 七〇〇、九二五、四七五弗に増加している。

右記の諸国のそれぞれの軍事費は、五ヶ年の期間のそれぞれにおいても、再調査すると増加しているのです。一八八一年から一九〇五年に至る全期間で、イギリスの軍事支出は四〇〇％にふくれ、アメリカは三〇〇％、ロシアは二〇〇％、ドイツは三五％、フランスは一五％、日本はざつと五〇％の増加である。これら諸国の軍事支出と、一九〇五年で終る二五年間の全支出とを比べてみると、その割合は次のよう上昇した。

イギリスで二〇％から三七％、アメリカで一五％から三七％、フランスで一六％から一八％、イタリアで一〇％から一五％、日本で一二％から一四％。他方ドイツでは、この割合が約五八％から二五％へダウンしたのは興味深い。この減少は、他の目的への帝室用支出の巨大な増加のためであり、事実は一九〇一年から一九〇五年に至る期間の軍事支出は、それ以前のどの五ヶ年より大きかったので

す。統計によると、全国家歳入に比例して軍事支出の非常に大きい国は、国名順に、イギリス、アメリカ、日本、フランス、イタリアの順です。

大海軍の費用を示して見るのも同じように印象的でしょう。一九〇五年で終る二五年間の海軍支出の増加は、だいたい次の通りとなる。

イギリス、三〇〇％ フランス、六〇〇％ ドイツ、六〇〇％ アメリカ、五二五％

ロシア、三〇〇％ イタリア、二五〇％ 日本、七〇〇％

イギリスを例外として、アメリカの海軍支出は他国のどれよりも多い。そしてこの出費は他の列強にくらべ、国の全歳出に占める割合でみても大きいのです。一八八一年から一八八五年に至る期間でアメリカ海軍の支出は、国家目的の全部に当てられる費用一〇〇弗当たり六二一〇弗であった。この額は次の五年の期間で六・六〇弗、次の五年で八・一〇弗、次の五年で一・七〇弗、そして一九〇一年から一九〇五年では、二六・四〇弗に上昇した。現在の五年の期間での支出は、さらに一層の増加を示すことはまず間違いあるまい。

軍国主義のふくれあがる費用は、人口にかける頭割税として、それを計算してみるとさらによく説明することができます。ここで取り扱っている比較の基礎である五年ずつの期間で最初の期間から最後の期間まで、上記の費用は次のように上昇している。

イギリスでは、一八・四七弗から五二・五〇弗 フランスでは、一九・六六弗から二三・六二弗

ドイツでは、一〇・一七弗から一五・五一弗 アメリカでは、五・六二弗から一三・六四弗
 ロシアでは、六・一四弗から 八・三七弗 イタリアでは、九・五九弗から一一・二四弗
 日本では、八六セントから 三・一一弗

軍国主義の経済的負担が重く感ぜられるのは、頭割にした費用の、こういう大ざっぱな評価額に関連しています。軍事支出の増大が、現在の計算から考えられるこれら各国の人口の増加を急速に追い越しつつあるという文句のつけようがない結論が、有効なデータから否応なく出てくるのです。言いかねば、軍国主義の増大した需要がこのまま続いてゆけば、これら各国は人と資源の段々大きくなる両方の消耗で脅かされるようになるでしょう。

愛国心にかかるこんな大きな浪費は、普通の知能を持つ人の、愛国心というこの病気を治すのに十分なはずである。しかも、愛国心はもつとと要求するのです。人びとは、愛国心を持てと迫られる。そして、自分たちの「守護者」を養ってやるだけでなく、自分たち自身の子供たちを犠牲にしても、こんなぜいたくのために金を払っているのです。愛国心は、国旗への忠誠を要求する。しかも、それは素直に進んで父母、兄弟、姉妹を殺せということなのだ。

これまで主張されているのは、外国からの侵入に備えて常備軍を持つということでした。しかし、知性をもつ人たちは、そんなことは愚か者を威したり無理強いしたりするための伝説や作り話だということを知っています。世界中の国々はお互いの利益を知っているから、お互いに攻め合うことはしないのです。戦争や征服よりも、国際裁判の議論によった方が得であるということを、各国は学んで知っている筈です。事実カーライルも言ったように、「戦争とは、あまりにも憶病で自分で戦うこと

をしない二人の盗人の間の喧嘩みたいなものである。だから、彼らは、一つの村からまた別の村から次々と若者をつれてきてユニフォームを着せ、鉄砲を持たせ、野獣のように放してやってお互いに戦わせるのである。」

あらゆる戦争を逆にたどってゆけば、同じような原因に行きつくのは大した知識を要求しないことです。われわれ自身の米西戦争を見てみよう。この戦争は、おそらくアメリカ合衆国の歴史上大きな愛国的な事件でした。凶暴なスペイン軍への怒りで、我々の心はいかに燃えさかったことか！もつとも我々の怒りが自然に燃え上ったわけではない。何ヶ月も何ヶ月も、新聞の煽動で仕込まれたもので人殺しワイラーが多くおりっぱなキューバ人を殺戮し、多くのキューバ婦人に暴行を加えてから大分経ってからである。さらに、アメリカ国民を公平に言えば、彼らは段々怒るようになり、戦おうと思うようになり、そして勇敢に戦ったのである。しかし、硝煙が消え、死者が埋められ、戦費が日用品や家賃の値上りとなって人々にはね返ってきた時に——つまり、我々の愛国的な宴からさめてみると——突然、米西戦争の原因が、砂糖価格のためだということが分りだしてきたのである。もつとはつきり言えば、アメリカ人の生命、血、金が、スペイン政府に脅かされたアメリカ資本家の利益を守るために使われたのである。このことが誇張ではなく動かすことのできない事実と数字に基づいたものなのは、アメリカ政府のキューバ労働者に対してとった態度で最もよく証明されます。キューバがしっかりとアメリカの手に握られると、キューバ解放に派遣された、その同じ軍隊が、米西戦争後すぐ起った葉巻製造所の大ストライキ中に、キューバ労働者に発砲を命じられたのでした。こんな原因で戦争するのはアメリカだけではない。恐ろしい日露戦争の動機についての幕開きが始まっているのである。この戦争では、大変な血と涙が流された。それでも猛々しい戦の神モーロク(セム族の神)の背

後には、商業主義というもつと烈しい神が立っていた。日露戦争中のロシア戦争担当大臣であったクロバトキン將軍は、この後者(商業主義)の真の秘密を暴露しました。ロシア皇帝とその皇子や大公が、朝鮮での利権に投資していたので、大きな財産を早く集積するという唯一の目的で、この戦争が促進されたのでした。

陸・海常備軍は平和の最善の保証だとする主張は、平和に徹した市民とは重裝備をして歩きまわる市民だと主張する論理と似ています。けれど日常生活の経験によれば、武装した個人は絶えず一生懸命力を試したがるものだということを証明している。歴史的に見て、各国政府についてもその通りです。本当に平和な国は、戦争準備に生命やエネルギーを浪費せず、その結果平和が保たれることになるのです。しかし、陸・海軍勢力の増加を求める大きな声は、何か外国からの危険のためなのではない。それは、大衆の増大しつつある不平不満と、労働者の国際的な時代精神を恐れる故なのです。いろんな国の当局者が備えをするのは、国内の敵に対処するため一度自覚したら、その国内の敵はどんな外国からの侵入者よりもっと危険なのです。

何世紀にもわたって大衆の奴隷化に取り組んできた権力者は、大衆の心理を徹底的に研究している。一般人は子供と同じで、失望や悲しみや涙が一寸した玩具が与えられると喜びに変わるのを知っているのです。そして、玩具の着物が豪勢であればあるほど、色が派手であればあるほど、その玩具は何百万の子供の頭脳をもった人びとへアピールする力も大きいのです。そして、陸軍と海軍がこの人びとにとって玩具なのです。玩具の魅力を増したり、もつと気に入るようにするのに、何百、何千というドルがこれらの玩具の展示に使われています。すべてのアメリカ市民に、合衆国の誇りと光栄を感じさせようとして、艦隊を装備しこれを太平洋沿岸に派遣するアメリカ政府の目的はそれなのです。

サンフランシスコ市が、この艦隊のもてなしに十萬ドルを費したし、ロスアンジェルスは六萬ドル、シアトルとタコマは約十萬ドルを出しました。この艦隊をもてなすのに、とわたしは言いましたか？ 本当は少数の上級士官の酒食のためにです。一方では、「勇敢な若者たち」は十分な食物を獲るのに、上官に反抗しなければならなかったのです。そうです、全国的に男も女も子供も街で飢えている時、多くの失業者が幾らでもいいから働きたいとしている時、火花や劇場パーティーや馬鹿騒ぎの費用に二六萬ドルが使われたのです。二六萬ドル！ こんな巨額の金を使って何か完成できなかったろうか。(やろうとすればできたはずだ。) しかし、パンと寝場所のかわりに、町の子供たちは艦隊見物につれてゆかれた。一新聞が書いた通り「子供にいつまでも残る思い出」となるようにである。

これが、忘れてはならぬすばらしい事なのでしょうか？ 文化的大量殺人の道具じゃありませんか。もし子供心が、こんな記憶で毒されねばならぬとしたら、人間の友愛の真の理解のためには、どんな希望があるのでしょうか。わたし達アメリカ人は平和愛好人間だと主張する。わたし達は流血を憎み、暴力に反対である。しかも、無力な市民の頭上に飛行機からダイナマイト爆弾を投下する可能性を考えると、わたし達はこみあげてくる喜びに浸るのです。わたし達は、経済上の必要から、産業界の人物の命を奪おうとして、自分の生命をかける者は、それが誰であろうと、すぐ縛り首にしたり、電気椅子送りにしたり、リンチを加えます。しかも、アメリカが地球上最も強い国家となりつつあるのだと思うと、そして結局他のすべての国々の首根つ子にアメリカの鉄の根を植えつけることになるのだと思うと、わたし達の心は誇りでふくれあがります。それこそ愛国心の論理なのだ。

愛国心が普通人に及ぼす悪い結果を考えても、それが兵士自身―迷信と無知の哀れな迷える犠牲者―の肩に背かず無礼や傷害にくらべると比較にならない。自国を救う者、国家を守る者である兵士―

彼のために愛国心は何を用意するだろうか。平和時期は奴隷の服従、悪と墮落の生活、戦時は危険な前線にさらされる死の生活なのです。

最近サンフランシスコで講演旅行中、わたしはプレシジオ（駐屯地）に行った。そこは湾と金門公園を見下す最も美しい場所です。彼の地の目標は、子供たちの遊び場、疲れた人びとのリクリエーション用の庭園と音楽である筈でした。ところがその代りに、兵舎―そこへ金持連中は自分たちの犬どもを住まわせるようなことはしない―を建て、醜悪な、くすんだ灰色の場所にしてしまったのです。これらの悲惨な堀つ建て小屋に、兵士たちは牛のように追い集められ、上官の靴や真鍮製のボタンをみがきながら、自らの青春の日々を浪費しているのです。そこでまたわたしは、階級差別を見た―自由な共和国のがつしりした若者たちが、罪人みたいに列をなして並び、通りかかる中尉ごときに敬礼をしているのです。これがアメリカ的平等、墮落してゆく男らしさ、制服を高めることなのですか？

兵舎生活は、さらに性的墮落傾向を促進しやすい。そのため、ヨーロッパの軍隊状態と似たような結果が、徐々に生まれてきています。性心理学の著名な作家、ハバロック・エリスは、この問題を徹底的に研究しました。わたしは次の文章を引用します。「兵舎の中には男色の大きなセンターになっている所がある……売春をする兵士は、信じがたいほど多くなっている。ある連隊では、多くの男性が金次第で身体を売っていると推定するのは言いすぎではない……夏の夕方など、ハイドパークやアルバート・ゲートの周辺は、あまり変装もせず、制服を着たり着なかったりして、活気のある取引きをする衛兵やその他があふれている。多くの場合、そうした稼ぎが、英国兵のポケットマネーをかなり増してくれることになるのである。」

どの程度までかような墮落が陸・海軍の中に入りこんでいったかは、特別な家が売春用に建てられ

ている事実から、もつともよく判断されよう。これはイギリスに限ったことでなく、世界的なものです。「フランスにおいても、イギリスやドイツにおいてと同じように兵隊を探している。そして、軍用売春宿はパリやその他の守備隊駐屯都市に存在するのだ。」

ハバロック・エリス氏が、性的錯倒研究の中にもしアメリカを含めたら、同じ状態は他国の軍隊におけると同じように、アメリカの軍隊の中にも広まっているのを発見したでしょう。常備軍の拡大が性的墮落の広がりを増してゆくのは、避けられないことです。兵舎は、細菌培養器です。

性的影響を別にしても、兵舎の生活は除隊した兵士が、有用な労働に就くのを不向きにする傾向がある。一つの仕事に熟練している人たちは、減多に陸・海軍へは入ってこないものだが、それでも一度軍隊の経験を経ると、そういう人びとでさえ以前の職業には全く不向きになってしまふのです。怠惰癖や興奮と冒険の味を身につけてしまふので、彼らは平和な仕事には満足できなくなる。軍隊から解放されても、役に立つ仕事には戻れないのです。そこで生活の闘いとか本人の性格によって、社会的なならず者や出獄者などの階層へと落ちていくのが普通です。兵役を終えた人びとが、以前よりもっと残忍になり、もっと墮落して再び以前の犯罪生活へ戻るのはよく知られた事実です。

一方陸海軍は、非常に多くの前科者で供給されているのはよく知られた事実です。わたしが今述べたすべての悪い結果のうちでも、ウィリアム・ブヴァルダ一等兵の場合ほど、愛国心の精神が人間の尊厳に有害であることを示した事例は他にない。というのは人は兵士でありうるし、同時に人間として自分の権利を行使できると、彼が愚かにも信じていたので、軍事当局は彼をきびしく罰しました。彼は十五年間、自国に奉仕し、その期間中、彼の記録は非の打ちどころがなかったのも事実です。ブヴァルダの判決を三年に縮めたあのファンストン將軍によれば、「士官又は兵籍に入っ

たものの第一の義務は、政府に対する絶対の服従と忠誠である。そして彼が政府を認めようと認めまいと、それは問題ではない。」このようにしてフランス人は、忠誠というものの真の性格を粉碎したのである。彼によれば、軍隊に入るといことは、独立宣言の原則を踏みにじることなのである。考える生物（人間）を忠実な機械に変えるとは、何という奇妙な愛国心の発展でしょう！

ブアルダに対する酷く無法な判決を弁明するために、フランス人将軍は、あの兵士の行動は、「反逆に相当する重い罪」であつたとアメリカ国民に語っている。さて、この「恐ろしい罪」は一体どのようなものから成り立っているのだろうか。ウィリアム・ブアルダは、サンフランシスコでの公開の会合に出席した千五百人の中の一人であつたということ、そして、恐ろしいことに、講演者つまりエマ・ゴールドマンと彼が握手したということ、簡単に言えば、それが罪なのです。それは事実、一つの恐ろしい罪、すなわち將軍の言う「脱走よりもっと決定的に悪い、一大軍事的違反」なのである。けれどもかように、一人の人間に犯罪人の烙印を押し、投獄し、彼の十五年間に亘る忠実な奉仕の実績を奪い取ってしまうことほど、より大きな愛国心に対する告発がありうるでしょうか。

ブアルダは、彼の生涯の最良の時期と真の男盛りの時期を祖国のためにささげた。しかし、これらのことは、無に等しかつたのです。愛国心は冷酷であり、貪欲な怪物にも似て、すべてかあるいは無かを要求するのです。愛国心は、兵士が自分の感情、意見、好み、考えをもつ権利をそなえた一個の人間であるのを認めない。その通り、愛国心はそんなことは認めないのだ。これがブアルダの学ばされた教訓であり、しかもそれは、全然価値のないどころか、どちらかと言えば、高価な費用を払って学ばされた教訓なのです。彼が自由を取り戻した時は、軍隊における地位を失っていた。しかし、彼は自尊心を取り戻したのである。結局、それが三年間の投獄に値したという訳です。

最近の記事で、アメリカの軍事状態について書いたある人がドイツにおける軍人の、一般市民に対する力について述べている。もしわたし達の共和国が、一般市民の平等の権利を保証する以外に意味を持たないとしたら、共和国は正当な存在理由を持つものではないのです。この記者は、ベル將軍の愛国的政權の間は、コロラドにいなかったのだとわたしは確信します。もし、彼が、愛国心と共和国の名のもとに、人びとが留置場に放りこまれ、ひきずりまわされ、国境外へ追いつたてられ、あらゆる侮辱を受けた有様を見たとしたら、彼の意見も恐らく変わつたでしょう。そして、このコロラド事件は、合衆国における軍事力増強の中で、ただ一つの事件ではないのです。軍隊や国民軍が、政權を取つた人びとを助けに來ない所や、カイザーの制服につつまれた者たちがやるような、横柄で残酷なことをしない所では、ほとんどストライキはないのだ。そしてまた、わたし達はドイツ軍法を持っているのである。この記者は、それを忘れてしまったのでしょうか。

大方の記者についての大きな不幸は、記者が現在起っている出来事に全く無知であるか、または正直さを欠いているため、それらの事柄を語ろうとしないことです。だから、ドイツ軍法がほとんど討論されずに、しかも公表もされずに議會をアツと言う間に通過してしまつたのである。——この法律は、平和な市民を血に飢えた殺人者にする権限を大統領に与えるものでした。それは、おそらく国防のためでしょうが、実は大統領が代弁者となつてあるあの特別な政党の利益の防衛のためなのです。記者は、旧世界では兵役が義務制だが、アメリカは志願であるから、軍国主義が外国におけるように強力になることは決してないと主張する。だが、この紳士は非常に大事な二つの事実を、考慮を払うのを忘れてゐる。第一に、徴兵制がヨーロッパですべての社会階層の間に深く根を下ろした軍国主義への憎悪を創り出したこと。何千という若者が、嫌々ながら兵役に入り、一旦軍隊に入ると、あらゆ

る手段を用いて脱走をはかるのです。第二に、徴兵制は軍国主義の義務的特徴で、これがヨーロッパの国々が何よりも恐れる、恐ろしい反軍国主義を創り出したこと。結局、資本主義の防波堤は、軍国主義なのである。軍国主義がその土台を浸食した瞬間に、資本主義はぐらぐらと危険になるのです。もともと、米国に徴兵制はない、つまり通常強制的に軍隊に入れられることはないが、わたし達は、今までもずっと強制的な根強い力を発達させてきました。―それは必要ということです。産業界が不景気な間は、夥しい入隊者（応募者）があるのは事実です。軍国主義稼業は金の儲かるものでも名誉あるものでもないが、むしろそれは仕事を求めて国内を放浪したり、給食の列に並んだり、市営の宿泊施設で寝るよりましなのである。要するに、それは月一三ドル、一日三度の食事と寝る場所が確保されることなのです。それでも、この必要だって、性格や男盛りというもちまえのものを軍隊に投入してしまうほど強力な要因にはならない。軍当局が陸軍や海軍に入隊してくる「哀れな材料」に不平不満を言うのは不思議ではない。しかしこの事実は、わたし達の勇気を鼓舞する合図になります。なぜなら普通のアメリカ人は、軍服を着るより飢餓に賭けるくらいに独立と自由への愛の精神が、まだ充分残されているのを証明するからです。

物事を考える世界の人びとが愛国心は現代のいろいろな要求を満たすには、狭すぎる限られた概念だと理解し始めています。力の中央集権化は、世界の被圧迫国民の間に国際的団結を生ぜしめました。それは、アメリカ鉱山労働者と搾取する同国人との間の調和であるより、アメリカの労働者と海外の友人達との間のより大きな利益の調和をあらわす団結である。それは外国の侵略を恐れない団結である。なぜなら、労働者たちが、「行つて自分たち自身の人殺しをやりなさい。我々はもう、あんた方のために十分長くやってきたのだ」と主人に向つて言う時、その団結はすべての労働者を結集させるも

のとなるのです。この団結は、兵士たちの意識さえ目覚めさせた。兵士たちもまた人間という大家族の一員なのです。団結は、今までの闘争を経て、昔に比べ絶対で確実なものだということが立証されている。しかも団結は、一八七一年のパリ・コミューンの間、パリの人民兵士たちが同胞への発砲を命ぜられた時、それに従うのを拒否した推進力となったのです。そしてまた団結は、最近数年間、ロシア軍艦内で暴動を起した乗組員へ勇気を与えたものでした。それは必然的に、国際的搾取者に反抗して、すべての圧迫され踏みにじられる者たちの暴動を引き起すに至るでしょう。

ヨーロッパ・プロレタリアートは、この団結という大きな力を理解しました。その結果、愛国心とその血なまぐさい亡霊、軍国主義に反対する戦いを始めたのです。フランス、ドイツ、ロシア、スカンジナビア諸国の牢獄は、何千という人びとで一杯になっています。それは、彼らが昔からの迷信にあえて挑戦したからなのです。この運動は、労働階級に限られているわけではない。それはあらゆる生活局面の代表者を含み、その主だった代表的人物は芸術、科学、文学界での秀れた男女でした。

アメリカもこれに従わねばならないでしょう。軍国主義精神は、すでにすべての職業に普及したのである。実のところわたしは他のどこよりもアメリカで軍国主義が一層大きな危険を生じさせているのだと思っています。というのは、資本主義はわれわれが破壊したいと思っている連中にたくさんのお金を与えているからです。

学校では、すでに始められている。「子供の心を呉れたら、型にはまった大人に仕立てよう。」政府は、明らかにこうしたジェスイット派の考えを固執しています。子供たちは軍隊式の訓練を受けているのです。カリキュラムでは、軍事的偉業の栄光が賞賛されているし、若者の心は毒されて、政府に都合よくなっているのです。さらに、アメリカの若者はどぎついポスターで、陸軍や海軍に入るよう

アピールされている。「世界を見学する絶好のチャンス！」官設の広告屋が叫ぶ。こうして、罪のない若者たちは、実際知らず知らずのうちにうかうかと、愛国心の虜になってしまふ。そして、軍神モーロクは、勝利を収めながら国中を闊歩するのです。アメリカの労働者は、兵士や州や国から悩まされるから、軍服を着用したこの寄生虫に嫌気がさし、又それに反対するのも全く当然です。けれども、単なる非難だけでは、この重大な問題を解決することはできない。必要なのは兵士向けの教育宣伝である。反愛国文学こそ、彼の職業への真の恐怖について、兵士を啓蒙するだろうし、またそれこそ、が本当に生きる際におかけをこうむる人びとの間の真の關係に氣付き、目覺めさせるのです。

当局が最も恐れるのは、はつきり言つてこのことなのです。軍人が急進派の会合に出席するのは、すでに国事犯なのである。もちろん、兵士が急進的なパンフレットを読むのも国事犯とみなされます。では当局は太古の昔からの進歩的段階の一步一步に反逆的だとのスタンブを押すつもりでしょうか。しかし、社会改革に真剣に努力する人びとは、これらのすべてに立ち向かう余裕がある。なぜなら、真理を工場内に持ち込むより、兵舎の中に運び入れる方がずっと重要でさえあるからです。われわれがこの愛国心の嘘偽の土台を掘りくずす時、はじめて大きな建造物への道を拓り開くことになるのです。そこにはすべての国家、国民が合一されて、全世界的な同胞が生まれるでしょう。

—それこそ真の自由社会である。—

評 言